

〔Free Talking〕

初 心 に 帰 っ て

千葉県畜産センター 宮原 強

1 SPF 養豚の現状

SPF 養豚は関係者の粘り強い努力により、消費者をはじめ、関係機関および流通業界などから、ようやく認知されてきた。

疾病対策、生産性向上や豚肉の高品質化、安全性などから、時代の要請と相俟って、一般養豚経営が減少する中でここ数年急速に増加している。日本SPF豚協会資料「SPF種豚豚飼養頭数の推移」平成元年から9年度までの数値をみると、飼養戸数は平成元年(415戸)、9年(388戸)で対比93.5%であり、若干減少しているが、一般養豚経営に比べて少ない(28.7%；50,200戸から14,400戸)。

飼養規模別では、繁殖種豚500頭以上の階層が増加している。特に1,000頭以上規模の経営の伸び率が大きい(約3.5倍)ことが特徴的である。

一方飼養頭数は着実な伸びを示し、この期間の全体の伸び率は158.2%(一般豚；82.7%)であり、特に平成元年から5年までは毎年2ケタの伸びを示している。しかし、平成6年から伸び率も鈍化し、平成8年には対前年比；93%に減少している。その理由は何によるものか、関係者の端くれとしては大変気になるところである。

この現実を直視し、もし改善するところがあれば速やかに実施し、SPF養豚の健全な発展を望むものである。

最近、SPF豚肉表示の豚肉が各スーパーなどで広く販売されるようになってきた。「安全・高

品質」ということでよく売れるという。筆者もよくスーパーの食肉売場をよくのぞいたり、店員に仕入先などを聞いたりする。そして外観(色、品質、脂肪付着状態、ドリップ)をよく見て、一般豚肉と比べてみたりする(職業柄?)。

その中で最近若干気にかかることがある。2~3年前までは、たしかにSPF豚肉は色、品質、脂肪の割合など非常によいものも多く見受けられた。実際に購入して食べてみてもおいしかった。しかし近年は、肉色のやや濃いものや脂肪量(特に3枚肉)の多いものが見られるようになってきた。一般豚肉とほとんど変わらないものが出てきているように思われる。

これは筆者の思い過ごしかもしれないが、今後、継続して消費者に受け入れてもらうためには、ただSPF豚肉の表示があればよく売れるので、「中身」は何でもよいという考えがもしあるとすれば、先行きが大変心配である。日本の消費者は、どの国よりも賢く、味(品質)や臭いなどには特に敏感であると言われている。その消費者に「SPF豚肉」が認知されたことをもっと大事にしたいものである。

さて、自動車の運転免許取得後は一定期間“若葉マーク”を付けて走行することになっている。一般的にこの期間中は、非常に慎重に運転するために事故も少ないが、若葉マークが外れたところから事故率が高くなるとよく言われている。SPF養豚がようやく認知され、“若葉マーク”が外れ

た時期ではないかと思われる。初心に帰って安全運転で行きたいものである。

2 SPF 養豚に望むこと

わが国の SPF 養豚もすでに先発グループは30年を経過し、経営者も2代目になっているところが多くなってきた。初代は非常に成績は良かったが、2代目になってからどうも成績が……、という声があることも事実である。そこで、SPF 豚農場に望む点を私見としてあげてみたい。

第1 SPF 豚状態の維持

今更言うまでもなく、SPF 養豚の本来の目的は、疾病の清浄化や飼育環境の改善等によって、その豚の持っている遺伝的能力を十分に発揮させ、養豚経営の生産性を向上させることにある。その結果として、SPF 豚肉の高品質、安全性などが随伴的についてくるものであると私は思う。すなわち、高品質、安全性は、その担保として、健康豚（清浄豚）であるということが条件になろう。

近年 SPF 豚農場から出荷された豚に“肺炎”などの所見が見られるという報告がある。SPF 豚農場が万一特定疾病に汚染されれば、もはや SPF 豚とは呼べないことになる。SPF 豚の GGP や GP 農場は種豚供給という役割上、徹底した管理やヘルスチェックなどが実施されているのでさほど問題はないと思う。しかし、急速に増加してきた CM 農場は、前述したようにその飼養規模も大きく、ヘルスチェックよりむしろ生産成績に重点が置かれていることや経済的理由などから、その清浄化が徹底しにくいことも予想される。

SPF 養豚は、ある一定水準の清浄度を維持

することによって初めてそのメリットが得られるのである。

第2 SPF 種豚群の育種改良の推進

畜産目的 SPF 豚は、遺伝的に改良された能力の高い種豚を SPF 化利用することにその意義がある。SPF 豚の生産システムは、生産ピラミッドの頂点に位置する GGP や GP 農場の SPF 種豚の能力がその傘下 CM 農場の繁殖豚の能力（繁殖、産肉など）や成績に直結している。したがって、そのピラミッドの種豚群の能力の良否は非常に重要なことになる。

近年、育種改良の進歩はめざましく、従来その改良が困難であった繁殖形質（産子数など）についても、新しい手法アニマルモデルによる“BLUP 法”により、その改良（評価）が可能になった。またさらに、遺伝子（DNA）レベルの解明が現在急速に進展しており、畜産分野の育種改良などへの応用研究が積極的に進められている。

SPF 養豚においても、この育種改良の分野で遅れをとることは、その技術の盛衰に関わる重要な課題であると思われる。したがって、SPF 種豚群の計画的な育種改良を今後検討していく必要があるであろう。

第3 指導者の育成

SPF 養豚に限らずどの分野においても人材育成は非常に重要なことになる。何の事業・仕事でも成功している事例を見ると必ず、そこには良い指導者がいる。わが国の SPF 養豚が普及定着してきたのは、そのピラミッドの頂点に波岡博士がおられたことではなかろうかと思う。そして、多くの人材（後継者、指導者）を育成されたからであろうと思われる。今後さら

に、SPF 養豚の普及推進を図っていく上においては、SPF 養豚の指導者を一人でも多く育成することではなからうか。

第4 SPF 豚のPR

現在、消費者の「食」に対する関心は、多くのアンケート調査などから、「健康」によいものである。すなわち「食の安全性」と「品質美味」であり、生産者の顔が見えるものが要求されている。

SPF 豚の生産システムやヘルスチェックシ

ステム、およびできあがった SPF 豚肉の品質の保証（農場認定）など、業者や消費者に正しいPR、情報提供をあらゆる機会をとらえて行っていく必要があるように思われる。

以上、SPF 養豚に対する辛口の見方をしたが、関係者の努力により、消費者をはじめ広く関係者に認知され、いよいよ SPF 養豚の真髄を発揮する時期到来であり、健全な発展を願う者の一人として私見を述べた。